

「名詞＋名詞」から「名詞＋ノ＋名詞」への移行

The Transition from “N + N” Construction
to Noun Phrase “N no N”伊藤友彦
Tomohiko Iro

（平成4年10月12日受理）

ABSTRACT

This paper presents a study of young children's understanding of a constraint on noun phrases (NP), which requires an NP to be marked for Case. For adults, this is a syntactic constraint. This constraint is called Case Filter in the theory of Generative Grammar. The speech of a child acquiring Japanese was studied longitudinally. The results showed that there was a stage when the child produced ungrammatical "N + N" construction. However, the construction was not produced productively at this stage. This stage continued about for three months. After the stage of "N + N" construction, the child began to produce the correct noun phrase, "N no N" productively. Two hypotheses (Continuity Hypothesis and Discontinuity Hypothesis) were discussed and it is concluded that Discontinuity Hypothesis could explain the present acquisition process properly and naturally.

はじめに

生成文法理論の枠組みでは、言語獲得は子供に生得的に与えられている普遍文法(Universal Grammar, UG)と生後子供が接する言語資料との相互作用によるとみなしている。ここで問題となるのはUGが言語獲得の過程でどのように機能するかという点である。Weissenborn他(1992)はUGに制約されない言語獲得段階が存在しないという考え方を連続仮説(Continuity Hypothesis)、存在するという考え方を不連続仮説(Discontinuity Hypothesis)に分類し、連続仮説をさらに強い連続仮説と弱い連続仮説に分類している(p.5)。

UGの下位理論の一つとして格理論(Case theory)がある。その中核をなす原理として提案されているものが格フィルター(Case Filter)である。格フィルターは「音形を持つ名詞句は格を持っていないなければならない」というものである。格フィルターの発現の仕方についても連続仮説が妥当である可能性と不連続仮説が妥当である可能性とがある。つまり格フィルターは獲得の初期から既に機能しているという考え方と言語獲得過程には格フィルターが発現していない段階があるという考え方である。格フィルターの発現については連続仮説と不連続仮説のどちらが妥当であろうか¹⁾。

Murasugi(1991)は格フィルターは獲得の初期から働くとみなしている。もしそうだとすればUGの原理に違反する段階は存在しないことになる。(1)a、bに対応する(2)a、bは明らかに格フィルター違反である。従って連続仮説の立場が正しいとすれば(2)a、bのような「名詞+名詞」発話は出現しないはずである。なお、*は非文を表す。

- (1) a たろうノぼうし
b じろうノくつ

- (2) a *たろう ぼうし
b *じろう くつ

しかし、(2)のような、属格を示す非文法的「名詞+名詞」段階が存在することは原田(1992)によれば「よく知られている」(p.73)が、Murasugi(1991)も原田(1992)も属格名詞句「名詞+ノ+名詞」獲得過程における「名詞+名詞」段階と格フィルターとの関係について全く言及していない。また属格名詞句「名詞+ノ+名詞」の獲得過程に視点をあてた詳しい報告は筆者の知る限りない。よって「名詞+名詞」発話が言語獲得過程において、いつごろどの程度出現し、どれだけの期間持続するのか、さらに「名詞+ノ+名詞」段階への移行はどのような経過で行なわれるのか、などの点は明らかにされていない。

本研究の目的は1)日本語の属格名詞句「名詞+ノ+名詞」に視点をあて、その獲得過程を縦断研究によって明らかにし、2)その獲得過程の特徴から格フィルターの発現の仕方について連続仮説と不連続仮説のどちらが妥当であるかを検討することである。

方 法

対象児は保育園児Sである。Sは日本の平均的な家庭の次女であり、今回の視点での観察開始時点での年齢は1歳11カ月であった。原則として一週間に一度筆者が保育園を訪問し、約一時間Sと遊びながら発話を筆記ないし録音した。なお筆者はSとそのクラスの保育園児を一年以上にわたって観察しており、今回の視点での観察開始時点で既に十分レポートはとれていた。なおSとの遊びの中で筆者は「名詞+ノ+名詞」の産出を促す話しかけを随時行なった。

結 果

表1は対象児Sの「名詞+名詞」段階から「名詞+ノ+名詞」段階に至る発話記録である。「ごうくんのティッシュ?」と筆者が聞いたのに対し、Sが「ごうくん ティッシュ」と答えたのがSから観察された初めての「名詞+名詞」発話であった。この時Sは1歳11カ月であった。

表1 対象児Sの「名詞+名詞」段階から「名詞+ノ+名詞」段階に至る発話記録

| | | |
|-----------------------|--------------------------|--|
| 1:11:0 ⁽¹⁾ | ごうくん ティッシュ。 | (「ごうくんのティッシュ?」に対して) |
| 1:11:1 | — ⁽²⁾ | |
| 1:11:2 | — | |
| 1:11:3 | | (誘導発話 ⁽³⁾ を約10回試みたが反応なし) |
| 2: 0:0 | ママ くつ | (モデリング法の刺激 ⁽⁴⁾ に対して3-4回に1回程度反応) |
| | ワンワン しっぽ | (モデリング法の刺激に対して3-4回に1回程度反応) |
| 2: 0:1 | そんち ⁽⁵⁾ ゾウさん。 | (「そんちのゾウさん?」に対して) |
| 2: 0:2 | — | |
| 2: 0:3 | — | |
| 2: 1:0 | そんち ブップ。 | (「そんちのブップ?」に対して) |
| 2: 1:1 | — | |
| 2: 1:2 | — | |
| 2: 1:3 | そんち ぼうし。 | (「これは誰の帽子?」に対して) |
| 2: 2:0 | そんち かお。 | (筆者の「そんちの顔」に続いて) |
| 2: 2:1 | | |
| 2: 2:2 | おとうさんのクツ大きい。 | (誘導発話に対して模倣的に) |
| | 保育園のお花。 | (誘導発話に対して模倣的に) |
| | おじさんのテープ。 | (誘導発話に対して模倣的に) |
| 2: 2:3 | そんちのアンパンマン。 | |
| | そんちのパパは? | |
| | そんちのママは? | |
| | そんちのおとうさんは? | |
| | そんちのワンワン。 | |
| | そんちのヒヨコあった。 | |
| | ママのヒヨコ。 | |
| | そんちのアンパンマン。 | |

- (1) 1歳11カ月0週を意味する。
- (2) データ収集が行われなかったことを示す。
- (3) 「名詞+ノ+名詞」の産出を促すための意図的な発話。
- (4) 子供に一对の絵を見せる。片方の絵についてモデルとなる発話を実験者がしてみせた後、もう一方の絵について子供に発話を促す方法。
- (5) 「そんち」は対象児Sの愛称である。

この日以前には「名詞+ノ+名詞」を促すための発話（例：「これはAちゃんのくつだねー、これはBちゃんのくつ。じゃこれはだれのくつかな？」など。以下、この種の発話を誘導発話と呼ぶ）を繰り返しても「名詞+ノ+名詞」はもちろんのこと「名詞+名詞」の発話も認められなかった。また表1から明らかなように、「ごうくんのティッシュ？」が観察された日以降、誘導発話ないしモデリング法による検査等で「名詞+ノ+名詞」発話を促すと、「名詞+名詞」という発話が観察されることがあった。しかし誘導発話の回数に対する「名詞+名詞」反応の頻度は低かった。この「名詞+名詞」段階は2歳2カ月第一週まで約3カ月間続いた。

2歳2カ月の第2週目はそれまでと著しく異なり、誘導発話に対する反応の頻度が急に高くなった。つまりこちらの誘導発話に対して積極的に応ずるようになり、しかもその反応は「名詞+名詞」ではなく、正しい形式である「名詞+ノ+名詞」であった。そしてそのわずか1週間後にSは「名詞+ノ+名詞」を自発的かつ生産的に用いた。

表1の発話記録をもとに対象児Sの「名詞+ノ+名詞」獲得過程を段階ごとに整理したのが表2である。「名詞+ノ+名詞」が自発的・生産的に発話されるようになるまでに次のような段階が認められた。段階1は「名詞+ノ+名詞」を促す発話によっても「名詞+名詞」発話も「名詞+ノ+名詞」発話も出現しない段階である。段階2は誘導発話によって「名詞+名詞」が出現するが、自発的、生産的には発話されない段階である。段階3は誘導発話によって「名詞+ノ+名詞」が頻繁に発話される段階である。段階4は自発的かつ生産的に「名詞+ノ+名詞」が出現する段階である。各段階の持続期間は第1段階は特定が困難であるが、第2段階は約3カ月、第3段階は約1週間であった。

表2 対象児Sの「名詞+ノ+名詞」の獲得過程

段階1：誘導発話⁽¹⁾によっても「名詞+名詞」発話も「名詞+ノ+名詞」発話も出現しない。

段階2：誘導発話によって「名詞+名詞」が出現することがある。

段階3：誘導発話によって「名詞+ノ+名詞」が頻繁に出現する。

段階4：自発的かつ生産的に「名詞+ノ+名詞」が出現する。

(1) 「名詞+ノ+名詞」の産出を促すための意図的な発話

考 察

対象児Sの属格名詞句獲得過程において「名詞+ノ+名詞」の前段階として「名詞+名詞」段階が約3カ月間存在した。この結果については言語獲得理論との関係から少なくとも二通りの考え方が可能である。一つは連続仮説の考え方であり、格フィルターは「名詞+名詞」の段階で既に機能しているという考え方である。もう一つは不連続仮説の考え方であり、格フィルターは「名詞+名詞」の段階では機能していないというものである。今回の縦断研究の結果はどちらの考え方を支持するだろうか。

最初に連続仮説の立場で今回の結果の説明を試みる。この立場にたつと、「名詞+名詞」段階で既に格フィルターが機能していると考えられるのだから、格フィルターが機能しているにもかかわらず「ノ」が欠けるのはなぜかを説明しなければならない。ここで考えられるのは言語知識そのものではなく、記憶など言語知識の使用に関わる要因の制約である²⁾。つまり「ノ」が欠けるのは言語知識の制約のためではなく、言語使用要因の制約によるという考え方である³⁾。しかし記憶の制約など言語使用要因による説明は発話の発達の変化に関して具体的には何の説明も予測もしない。例えば記憶を例にとってみよう。記憶の制約があるというだけでは記憶の制約によって欠ける要素が「ノ」であるのはなぜかを説明できず、かつどのような記憶の変化によって次の段階で「ノ」が出現するのかについて具体的な予測をすることができない。

これに対して不連続仮説の立場で「名詞+名詞」段階は格フィルターが機能していないとする。そうするとこの段階は「名詞+名詞」の出現を禁止する知識がないことになる。よって「名詞+名詞」発話の出現が可能となる。しかし格フィルターが発現すると「名詞+名詞」の存在が許されなくなる。その結果「名詞+ノ+名詞」段階への移行が行なわれる。このように、不連続仮説の立場に立つと、「名詞+名詞」段階が存在する理由のみならず「名詞+名詞」段階から「名詞+ノ+名詞」段階へ移行するメカニズムまで容易に説明することができる。

また今回の結果で注目すべきは「名詞+名詞」と「名詞+ノ+名詞」の出現の様相が著しく異なることである。「名詞+ノ+名詞」発話は誘導発話による出現後わずか一週間で自発的かつ生産的に出現する段階を迎えたのに対し、「名詞+名詞」は誘導発話による段階が約3カ月も続き、しかも自発的かつ生産的に出現する段階に移行することはなかった。この結果は「名詞+名詞」段階と「名詞+ノ+名詞」段階では言語知識に質的な相違があることを示唆しているものと捉えることができる。よってこの結果も間接的ではあるが、不連続仮説を支持するものと言える。

このように今回の結果については格フィルターは「名詞+名詞」段階では機能していないと考えた方が説明が容易である。その意味で不連続仮説の立場の方がより妥当性が高いといえる。

謝 辞

縦断データの収集にあたっては高松保育園の園長先生をはじめ皆様大変お世話になりました。感謝致します。また論文の作成において貴重な助言をいただいた静岡大学高見健一助教授、上田功助教授、白畑知彦助教授に御礼申し上げます。

注

- 1) 格フィルターを独立した条件として設定する必要があるかどうかについては議論が分かれるところであるが、本論文は格フィルターを認める立場に立つ。Felix(1986,1992)は不連続仮説の立場をとる代表的研究者の一人であり、X-bar理論、 θ 理論、格理論、束縛理論などをとりあげ、UGの原理がmatureすると主張している。一方Borer and Wexler(1987)はUGの原理がmatureすると考える点ではFelixと同じであるが、UGの原理に違反する段階はないと考える点で異なる。つまり、Borer and Wexler(1987)は連続説の立場に立つ。
- 2) 日本語においては格助詞または名詞句そのものの出現が随意的である。よって一般的には格助詞が出現しなかった場合、格助詞の使用が随意的であることを子供がすでに知っており、そのために格助詞を省略したという可能性がある。しかし属格名詞句「名詞+ノ+名詞」における「ノ」は省略すると非文となる。また属格助詞「ノ」はいったん獲得されると省略されることがないことが知られている。よって随意的であることを知っていたことによる「ノ」の省略の可能性はないと考えられる。
- 3) 子どもが言語獲得の過程である一定の段階をたどるのはなぜかという問題（発達的問題）を検討しようとする場合、言語能力による説明と言語使用による説明のどちらが妥当であるかが常に問題となる。特定の発達的問題に対して言語知識による説明が提案されると、それは記憶など言語知識以外の要因による対案が提示されることはよくある。その場合対案が言語知識による説明を否定するのみで、対案事態にその発達的問題を説明する力がない場合がある。その一つの例が記憶の要因である。

文 献

- Borer, Hagit and Wexler, Kenneth. "The Maturation of Syntax." *Parameter Setting*. Eds Thomas Roeper and Edwin Williams. Dordrecht, the Netherlands: Reidel, 1987. 123-172.
- Felix, Sascha W. *Cognition and Language Growth*. Dordrecht, Holland: Foris Publications, 1986.
- Felix, Sascha W. "Language Acquisition as a Maturation Process." *Theoretical Issues in Language Acquisition: Continuity and Change in Development*. Eds Jurgen Weissenborn, Helen Goodluck, and Thomas Roeper. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, 1992. 25-51.
- 原田かづ子 「アオイノメ：原理とパラメータ理論と言語獲得」『言語』四月号#1992. 72-75.

- Murasugi, Keiko. *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition*. Unpublished Ph. D. Dissertation, U. of Connecticut, 1991.
- Weissenborn, Jurgen., Goodluck, Helen and Roeper, Thomas. "Introduction: Old and New Problems in the Study of Language Acquisition." *Theoretical Issues in Language Acquisition: Continuity and Change in Development*. Eds Jurgen Weissenborn, Helen Goodluck, and Thomas Roeper. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, 1992. 1-23.